

氏名	三 野 善 央		
学 位 の 種 類	医 学 博 士		
学 位 授 与 番 号	甲 第 597 号		
学 位 授 与 の 日 付	昭和60年 3 月31日		
学 位 授 与 の 要 件	医学研究科社会医学系衛生学専攻 (学位規則第5条第1項該当)		
学 位 論 文 題 目	注意集中障害児の経過に関する研究 — 一日常・学校生活への適応について —		
論 文 審 査 委 員	教授 緒方正名	教授 大月三郎	教授 木本 浩

学位論文内容の要旨

注意集中障害（以下 ADD とする）は DSM-Ⅲ において、これまでの微細脳機能障害、多動症候群にかわる診断名として提案されている。

学童期の ADD 児の日常生活、学校生活の中での適応上の問題点、学習障害の実態を明らかにし、成長に伴う問題点の変化を明確にする目的で、ADD 児の両親、担任教師に対し質問紙調査を行い、学年別に比較検討した。

その結果、日常生活においては協応運動能力、役割遂行能力は成長に伴い改善していた。多動性は就学前に改善していたが、注意集中障害は高率に認められ、成長に伴う改善は認められなかった。

学校生活では対人関係上の問題を残すものは、全体の60%のものに認められていた。また、基礎的国語能力は多くの場合獲得されていたが、一般児童と比較すると遅れの多いものも多く、その遅れは成長とともに大きくなっており、ADD と学習障害との関連が明らかとなった。

論文審査の結果の要旨

注意集中障害（以下 ADD とする）は、微細脳機能障害、多動症候群にかわる診断名として提案されている。

学童期の ADD 児の両親、担任教師に対し質問紙調査を行ない、学年別に比較検討した。その結果日常生活において、注意集中障害は高率で、成長に伴う改善は認められな

かった。学校生活では対人関係上の問題を残すものは全体の60%のものに認められており、また、ADDと学習障害との関連が明らかとなった。